

モンゴル国における遊牧生活のフィールドワークと歴史 意識の調査

文学部人文社会学科東洋史学専攻 2年 坂田空

■活動場所：モンゴル国（ウランバートル、郊外のゲルホストハウス）

■活動期間：9/3～9/13

目次

1. 活動目的
2. 都市・遊牧生活
 - ◎行動日程
 - ◎ゲルの方々・家族構成
 - ◎仔馬の印祭り
 - ◎ヤギの屠殺
 - ◎食生活
 - ◎下痢、馬乳酒
 - ◎遊牧生活をする人・都市に住む人
3. 歴史意識の調査
 - ・歴史像の変遷
 - ・博物館にて
 - ・ゲストハウスの方、ガイドの方
 - ・中学の歴史教科書

終わりに

1. 活動目的

高校時代からモンゴル国に行ってみたくてという願望があった。高校世界史で中国、さらにはユーラシア大陸の歴史を遊牧民が大きく動かしてきたことを知った。それまでの中国などの定住社会中心の歴史観が大きくひっくり返された。なかでも、モンゴル高原は多くの遊牧勢力が勃興してきた草原である。しかし、現在は急激に都市化が進み、遊牧民の人口も全体の一割ほどである。都市部への人口集中が加速しているモンゴルで今の遊牧生活を体験してみたいと思った。

遊牧民の存在はユーラシア史に欠かせない。特に13世紀のモンゴル帝国の成立は世界史に大きな意味を持ち、研究も進められているが、当のモンゴルの人々の歴史意識はどのようなものか、あった人からの話、教科書、博物館から調査していく、

2. 都市・遊牧生活体験記

◎行動日程

9/3 15時成田を離陸。20時モンゴル、チンギス・ハーン国際空港に着く。ガイドのバーギさんに一時間ほどかけウランバートルに送ってもらい、市内のホテルで一泊

9/4 朝食後、ガイドのバーギさんに一時間半程かけホストハウスのゲルへ送ってもらう。奥さんのトンガーさんが迎えてくれた。ホストハウスの方々に挨拶をし、牛の糞掃除などの手伝いをさせてもらう。6時頃になり旦那のバートムフさんが息子のダーキーと馬に乗り帰ってきた。そのまま、乗馬体験をさせてもらい馬に乗ったまま渡河、川の向こうのバートムフさんの親戚を連れて帰ってくるようだった。夕食はその親戚の方とバートムフさんの父トンボンさんのゲルでいただいた。

9/5 モンゴルの伝統行事、仔馬の印祭りに参加させていただいた。7つほどの家が集まり、仔馬に焼き印をつけ、宴会する。宴会自体は3時ほどで終わったが、我々一向は残り、8時ぐらいまで続いた。

9/6 午前中、牛の糞集めなどの手伝い。バートムフさんに連れられて馬に乗り、放牧していたヤギを柵に追い詰めて入れ、ヤギの屠殺を手伝った。その後、まだ印をつけていない仔馬に焼き印をつける。夜、一緒に暮らしているトゥッシュントグスさんの誕生日会で参加させてもらった。親戚がかなり多く集まっていた。

9/7 深夜から下痢になっていた。寝付けない状態で夜を明かした。腹痛、下痢の旨を伝え、病院に行くことになった。薬をもらい少し良くなったと思ったが、嘔吐してしまい、元気なときは食べていたモンゴル料理も口に入らなくなってしまった。旅行会社のガンゾリクさんに来てもらい、ウランバートルの病院に行き、市内のホテルに泊まらせてもらった。

9/8 腹痛、下痢も少し改善し、午後からウランバートルを散策した。チンギス・ハーン博物館に入館した。8階建ての大きなビルのような近代的な博物館ですべて見るのにかなり時間を使った。日本企業と提携しているホテルで日本食レストラン、心身共にかなり回復した。

9/9 体調も回復したので、ゲルへもどることになった。土日のためバッチンギルさんの娘夫

婦が二組来ていた。バートムフさんと娘のズーレザラトガちゃんと乗馬でチンギス・ハーン銅像に向かった。その後、牛の乳しぼりの手伝い。

9/10 午前中はズーレザラトガちゃんら子どもたちと遊んだ。バートムフさん、ズーレザラトガちゃんと隣のゲルに訪問した。このゲルにも土日で都市から帰ってきた家族がいて、二人の男の子と遊んだ。

9/11 昼食後、ゲルの方々に感謝を伝えゲルを後にした。ガイドのナンザイさんとウランバートルにもどり、ザイサンザイサンの丘を訪れた。急成長するウランバートルを一望できた。民族舞踊のステージを鑑賞。ナンザイさんの自宅で夕食を頂いた。市内のホテルで一泊。

9/12 ナンザイさんの息子のエンヘオド君が日本語を勉強しているということで、市内観光のガイドをしてくれた。同時に教科書にも尽力してくれ無事に購入することができた。国立歴史博物と中には入れなかったがボグドハーン宮殿を訪れた。夕食はレストランでモンゴル料理を食べた。

9/13 早朝ナンザイさんが空港まで送迎してくれ、7時45分チンギス・ハーン空港を離陸した。

体調不良で当初の予定通りとはならなかったが、旅行会社の調整、ゲルの方々のおかげで十分な日程をとることができた。

◎ゲル・ホストハウスの方々・家族構成

今後の説明のため、ゲルに泊まらせていただいたゲルの方々を紹介していこうと思う。

- ・トンガーさん、オーロボムさん、ダーキー（20）、ズーレザラトガ（8）家族

ゲルに到着したときにまず出迎えてくれたのがトンガーさんで、色々な手伝いをさせてくれた。

オーロボムさんはこの家族の旦那で、細身ながら豪快な方で乗馬など沢山連れまわしてもらい、色々なものを見ることができた。

ダーキーは私と同じ20歳で、高校を卒業した後はゲルに戻って家業の手伝いをしているよう。

ズーレザラトガちゃん、平日はウランバートルの学校寮で暮らしていて、土日にゲルの実家に戻ってきているようだった。

- ・トンボンさん（88）、バッチンギルさん（61）親子

トンボンさんは88歳の長命な方で、オーロボムさんの父親。奥さんはすでに他界してしまっていて、次女のバッチンギルさんが介護で二か月ほどウランバートルを離れてゲルに来ているそうだ。

バッチンギルさんは非常に明るい人ですぐに私を打ち解けさせてくれた。朝ごはんやお昼ご飯は基本的にバッチンギルさんにご馳走になった。一番お世話になった方である。

- ・トゥッシュントグスさん、バツェツェグさん、ガンボーローズ家族

オーロボムさん一家、トンボンさんたちとの関係を聞き損ねた（おおよそ親戚）と一緒に暮らしていた。バツェツェグさんはトンガーさんと同じゲルで寝ていて、ゲルは男女で分

かれているようであった。

寝泊りするゲルは3つあった。トンガーさん、バツエツツェグさん、ズーレザラトガちゃんが寝る女性用のゲル、オーロボムさん、ダーキー、トゥッシュントグスさんが寝る男性用のゲル、トンボンさんとバッチンギルさんが寝るゲルの3つだ。私は客人用のゲルに泊まらせてもらった。寝るところは男女で分かれているが、食事や集まるときは女性用のゲルであった。

・親一子を基本単位とする核家族ではなく、血縁の繋がりをもった3つの家族が共同生活をしていた。

◎仔馬の印祭り

仔馬の印祭りはモンゴルの伝統行事で毎年の秋に焼き印のついていない自分の仔馬に焼き印をつける行事だ。飼われている馬でもほぼ野生の状態での放牧をしているため、他人の馬と自分の馬を見分けるために焼き印をつける必要があるのだ。「モンゴルの日・馬乳酒の祭り」(作シラブ：1869—1939)という絵画に大量の馬乳酒を囲みながら、馬の去勢、焼き印をしている姿が描かれる。この仔馬の印祭りでも馬乳酒が多く振舞われていた。伝統的な行事に参加できて大変幸運だった。

仔馬の印祭りに参加したのは、オーロボムさん、ダーキー、トゥッシュントグスさん、親戚の男性2人(名前を書き残し忘れてしまった)、私の6人で向かった。ゲルから一時間半ほど車を走らせ会場についた。後部座席に大人が4人乗っていたので、まともに座ることなど出来なかった。会場にはすでにほかの家族が集まっていて、男性用テント、女性用のテントで分かれていた。7つの家が集まり、総勢30名ほどが居た。

女性用のテントで作られたご飯、馬乳酒が振舞われた。家ごとに馬の群れを放牧地から連れてきて円形の柵に追い込む。この際参加しているほとんどの男性が協力する。柵の入り口を中心に弧を描くように広がり、大声で馬を威嚇し馬が柵に入るようにする。馬やバイクに乗り、馬を追い立てる役と堂々と立ち威嚇する役とにわかれ、全員で柵に馬を追いやる。遊牧民の勇ましさと馬の迫力を感じる光景だった。群れが柵に入ると2、3人で柵の中に入っていく、印のついていない仔馬にカウボーイのように縄をかける。仔馬の首に縄がかかると柵の外に連れていく。仔馬といえども抵抗は激しく、屈強な男たちを引きずり回すので、2、3人がかりの作業となる。仔馬を横に倒すことができると、一人が馬の首元に座り、もう一人が腹部に座る。動けなくさせたら、前足、後ろ足をクロスさせ、ハダグと呼ばれる青い絹の布で足を縛る。印がくっきりと残るように左太腿の毛をハサミで切り、熱した焼き鏝で「ジュっ」と腿に当てる。しばらく当てたままにして、しっかりと印が着くようにしていた。焼き鏝を当てられた仔馬は激しく足をばたつかせ、いなないていた。少し心苦しい気にもなってしまった。しかし、オーロボムさんたちは伝統的な方法とは変わったやり方で印をつけていた。まず、腿を十分に濡らした上で、ハサミではなく、人用のカミソリで毛を丁寧に剃っ

ていた。そして、鑊を熱するのではなく、液体窒素を用い、低温やけどによって印をつけていたのだ。鑊を腿に当てる時間は焼き鑊に比べるとかなり長かったが、その分、苦しむ姿が少なかったと思う。印は伝統的に先祖から引き継がれているものから、五輪マークのような近代的なマークも見受けられた。液体窒素を使った印付けはオーロボムさんたちだけであった。さらに、GPS のついた白い首輪を一番大きな牡馬につけていた。(仔馬よりもはるかに大きく、体重のある牡馬を制御し、首輪をつけるのは一苦勞) 馬は大きな牡馬をリーダーにして群れを成す習性がある。牡馬に GPS をつければ群れの場所を特定することができるのだ。GPS をつけていないときはどうやって群れを見つけるのか、疑問だろう。一つ目の群れに印をつけたあと、GPS のついていない群れ探しに同行させてもらった。その方法はとても原始的なものだった。車を走らせて馬の群れをみつけたら双眼鏡で馬の印を確認する。よく見えなかったら群れの近くまで車を走らせしっかりと確認する。牧民とあつたら、「この印の馬いなかたか」と聞き込み、情報を頼りに行先を決めていく。そして、また群れを見つけては確認をする。モンゴル高原を四輪駆動で駆け巡り、自らの印のついた馬を探していた。2時間ほどかけ、ついに見つかった。見つけてからは柵のところまで車でうまく群れを誘導していく。GPS をつけてしまえば、自身の群れを見つける手間を大きく省くことができるのだ。祭りの会場にはもうほかの家族はおらず帰っていたため、残っていたのはオーロボム家族と主催している家族だけだった。夕刻を過ぎていた。この日は二つの群れの仔馬に印をつけて、牡馬に GPS をつけて終わった。オーロボムさんは5つの馬の群れを持っていて、一つの群れを家の近くの檻にとどめて、残りの4つの群れを自然に放牧させる。週一で群れをチェンジしているそうだ。ゲルに戻った時は10時頃になっていた。

オーロボムさんが多くの馬の群れを所有しているのは、乗馬体験の仕事もしているからだ。牧畜業だけでなく、ウランバートルから一時間でゲルに来れるのを生かして乗馬体験も営んでいる。連日団体のお客(韓国人が多かった、韓国ではモンゴルブームが来ているようだ)が乗馬しに来ていた。



◎ヤギの屠殺

ゲル生活3日目、ヤギの屠殺を手伝わせてもらった。後から分かったが、トッシントウグスさんの誕生日でお祝いの日だったため、ヤギの屠殺を行った。私も足を押さえておくなどの手伝いをしたが、オーロボムさんがほとんど一人で解体をしていた。柵の中から一匹を連れてくる。ハンマーで眉間を一発二発と叩き、気絶させる。仰向けにし、心臓にナイフを入れ、手を突っ込み、心臓を止める。血は一切でない。脚から皮を裂いていく。四本の脚、腹の皮を裂く。ヤギの角を針金で巻き、吊るす。裂き目に手を突っ込み、皮膚をはがしていく。服を脱ぐように皮膚が肉体を離れていった。皮が剥げると、皮を下敷きにしてヤギを置き、

内臓の解体を始めた。腹を裂くと内臓が溢れ出してしてきた。内臓の処理はトンガーさんと二人で行っていた。オーロボムさんが引き続き肉を解体し、トンガーさんが大腸などの内臓を洗っていた。余すところなく食材に使っていた。屠殺も初めて見たので、見ているだけだったが緊張していた。命のありがたさというのは穏やかなものではなかった。死んだヤギの目が恐ろしかった。遊牧民の生活と密接に関わる家畜の屠殺をこの目で見ることは大きな財産である。

◎食生活

モンゴルの料理は赤い食べ物（オラー・イデー）と白い食べ物（ツァガン・イデー）に分かれる。赤い食べ物は肉で白い食べ物は乳製品だ。夏の乳製品、冬の肉とよく言われ。冬にはお乳が出ないため肉を食べ、夏には多様な形で加工された乳製品を食べる。秋は冬の準備の多く家畜が殺され、加工されるが、まだその時期ではないらしかった。家畜の屠殺の一度行われたただけだった。赤い食べ物、白い食べ物の他にも、小麦料理が多かった。主食は小麦と言っていいだろう。

乳製品

- ・ウルム（ヤクの生クリーム）

ゲストハウスに来た時初めて食べた乳製品だ。パンに塗って食べる。自然の甘さ、優しい甘さで、美味。ウランバートルでは食べられないとバーギさんが嬉しそうに食べていた。朝食によく出てきて、食パン、クッキーのような甘いパン、フランスパンに塗って食べた。パンは市販のもの。

- ・アーロール

乾燥させたチーズのようなもの。最初食べたときは酸っぱく、モソモソしていた苦手だったが、慣れてくると不思議と手が伸びてしまうようになった。クセになるお菓子みたいな感覚。

小麦+肉料理

- ・ゴイモントル・ショル

羊肉の肉うどん。細切れにした羊肉、ジャガイモ、細いうどんを塩味で頂く。美味。癖が強くなく、おなかを壊したあとでも、おいしく頂けた。



- ・ボーズ

羊肉の肉餃子。水餃子。蒸して作る。羊肉をみじん切りにして、小麦の皮で包む。少しクセは残るが、肉汁が溢れ美味である。

- ・ツァイウオン

焼きうどん。小麦粉を練って、薄く延ばす。きし麺サイズで麺を切り、レバー、ジャガイモと一緒に焼く。仔馬の印祭りとナンザイさんの家で振舞ってもらった。レバーが口に合わず、

少し苦手。ナンザイさんに振舞ってもらったものにはレバーが入っていなかったのでおいしく頂いた。

肉料理

・ホルホグ

羊や山羊の蒸し焼き。仔馬の印祭り、山羊を解体した日の誕生日会で振舞われた。モンゴル人にとってご馳走。鍋の中に焼き石をいれ、一気に蒸し上げる。臭みはほとんどなく、豪快に齧り付く。味付けは塩のみ、肉の旨味、野菜の旨味が存分に出ていて美味しかった。誕生日の時はすでにおなかが少し痛く。思い切り食べられなかったのが非常に残念。



◎下痢、馬乳酒

先述したが、下痢になった。おそらく、馬乳酒が原因である。よく、慣れていない旅人がおなかを壊すらしいし、慣れているはずの現地人ですら、壊すらしい。事前に把握していなかったことを大いに反省した。

しかし、馬乳酒は医療として使われているらしい。伝統療法として、馬乳酒を1か月ほど飲み続け、体の不調を治すのにも使われているようだ。馬乳酒が振舞われた仔馬の印祭りは夏が終わりはじめ、冬が始まりだす季節である。モンゴル遊牧民にとって、季節の変わり目は食の変わり目でもある。乳製品中心から肉中心の食生活となる。強い胃の洗浄作用をもつ馬乳酒は肉中心の食生活が始まるのを前に飲むことで、胃を洗浄する、強固にする効果があるという研究もある。私がおなかを壊したのも遊牧生活から得られた知恵によるものだと思うと、感慨深い。

◎遊牧生活をする人・都市に住む人

オーロボムさんの家は牧畜業のほかに、乗馬体験、今回の私のような旅行者のホームステイ先といった仕事など、旅行会社と提携し、多くの仕事を引き受けている。ウランバートルから車で一時間少しのところにゲルがあるという利点を生かして仕事をしているようだ。馬の数もかなり多いと思われる。一度お隣のゲルに行ったが、そのゲルは馬を一匹も所有していなかった。オーロボムさん家の暮らしは都市生活と遊牧生活、どちらにも軸足を置くようなライフスタイルである。都市に住む理由として、子どもに教育を与えたいという理由が大半を占める。当然、遊牧生活だけでは、自給自足的なので、教育費の捻出は出来ない。しかし、旅行会社との提携により乗馬体験などで収入を得ることで、教育費などのための貯蓄ができる状況にあるのだろう。ウランバートル郊外で遊牧生活を送る一つの成功例のような家庭なのではないだろうか。オーロボムさん自身も首都ウランバートルで世話しなく働くより

も、ゲルに住み、自然を感じながら生活できる現在のライフスタイル（「スローなライフ」と本人は言っていた）を好んでいるようだった。

一方、ガイドのナンザイさんは西モンゴル出身で貧しいながらも、日本語を懸命に勉強し、ガイドの職を手にして、ウランバートルで家庭を持てていることを「幸せだ」と話してくれた。ナンザイさんはそのほかにも、子どもの時期に経験した社会主義国の肯定的なイメージや現代モンゴルの問題でもある政治汚職についてなど、様々な話をきかせてくれた。

3. 歴史意識の調査

◎歴史意識の変遷

モンゴルの歴史を代表する人物と言えば、「チンギス・ハーン」とほとんどの人が答えるだろう。なぜ、モンゴルと言えば「チンギス・ハーン」となるに至ったか、モンゴルの人々の歴史意識を探るために、歴史的なチンギス・ハーン像の変遷に注目しようと思う。チンギス・ハーンはこの100年、当時の政治状況により大きく評価がゆれてきた。社会主義期以前は神話的で、昔話の勇者のような性格をもつ存在であり、仏教的な神格化がされていた。しかし、1922年、社会主義期になり近代国家を作ろうとする際に歴史上の人物としてのチンギス・ハーンが求められた。モンゴル人がナショナリズムを形成する際にチンギス・ハーンをモンゴル人の「共通の祖先」としてイメージできるようにするためだ。そして、A・アマルの書いたモンゴル最初の歴史書である『モンゴル簡史』（1934）は非常に民族主義的な立場から書かれたチンギス・ハーン伝であった。しかし、1939年、A・アマルは「民族主義者」「反革命」として逮捕、処刑される。ソ連に阿るモンゴル人民政府が民族主義を弾圧したからだ。そして、民族主義的なチンギス・ハーン像は表舞台から姿を消す。しかし1990年代に入り民主化すると「民族の英雄」「共通の祖先」としてのチンギス・ハーンがというイメージも復活、浸透していった。そして、現在はどうかであろうか。

近年の歴史学では一国史の束をまとめた世界史ではなく、一国史的な見方からの脱却を目指すグローバル・ヒストリーが提唱されている。アブー・ルゴドの『ヨーロッパ覇権以前：もう一つの世界システム』（1989）ではモンゴル帝国による、ユーラシアの各経済圏のゆるやかな一体化による世界システムの出現が提唱されている。日本でも杉山正明氏をはじめとして、遊牧民の歴史の評価が進んでいる。そんな中、モンゴルではグローバル・ヒストリー的な歴史観は反映されているのか、いないのか。どう反映されているのか。あった人々、博物館、歴史の教科書から見ていこうと思う。

◎ホストハウスの方々、ガイドの方

ホストハウスの方々には、ご自身の話、自分の祖先の話などを聞こうと思ったが、正直に言うと成果を上げられなかった。オーロボムさん、バッチンギルさんに自分たちの祖先の歴史について質問してみたが「聞いていることはない」と返ってきた。トンボンさんに質問したかったが、モンゴル語ができない状態で、スマホを差し向けてやり取りするのは失礼だと今更ながら思い、思い切って質問することが出来なかった。しかし、チンギス・ハーンにはオーロボムさんもバッチンギルさんも「我々の祖先だ」と言っていた。バッチンギルさんは「世

界の半分を馬に乗って遊んでいた」と面白い表現をしていた。

ガイドのナンザイさんの息子エンヘオド君（17）も「彼は内部紛争していた地域に平和をもたらした、世界に平和をもたらしたから、ちょっと優しいと思う」と答えてくれた。

チンギス・ハーンが「共通の祖先」「民族の英雄」というのは変わらずにナショナリズム・アイデンティティになっているだろう。エンヘオド君が「モンゴルの平和」を口にしていたが、オーロボムさんたちからはなかったので、歴史教育が更新されているのではないだろうか。

◎博物館

博物館にはチンギス・ハーン博物館と国立歴史博物館を訪れた。この二つの博物館は大きく展示の方法が異なっていた。そこには社会主義時代に作られた革命博物館が全身である国立歴史博物館と去年建てられたばかりのチンギス・ハーン博物館の作られた時代を感じることが出来た。

1. チンギス・ハーン博物館

9/8 に訪れた。9 階建ての近代的な博物館で 2022 年 10 月にオープンしたばかりである。先史時代の遺跡から、匈奴（フン帝国と紹介されていた）、鮮卑と続き、清代までのモンゴルの歴史をかなり詳しく見ていくところできた。

—近年の研究を取り入れたモンゴル帝国時代の展示—

「チンギス・ハーンは西洋と東洋の政治、経済、文化を完全に結び付け、今日のグローバル化の基礎を築いた」「チンギス・ハーンは大陸横断の偉大な所有者として国の基礎を築き、対外関係、貿易、通貨、道路通信、そして世界の発展をもたらした技術に根本的な変化を導入した」「世界の研究者は、偉大なるチンギス・ハーンを今日の世界の創始者であり、モンゴルの大平和を創造した天才として高く評価している」など民族の英雄としてだけではなく、近年の研究、外国の評価なども参考にしてチンギス・ハーンの偉大さを説明していた。軍事的、政治的な面からだけでなく様々な観点からの見方を参考にしたチンギス・ハーンの評価が為されていた。モンゴル時代に関しても「モンゴル人は何百年もの間、人々がおたがいに平和を見つけることが出来なかったやり方を変え、中東の人々は関係の安定を確保し、紛争や誤解、統一政策は存在しなかった。モンゴル帝国の成立により、西側と東側の人々の間の誤解、宗教的、文化的な違い、対立、そしてそれらの間の危機は解消され、世界の貿易経済世界はその範囲を拡大し、人々におおきなチャンスをもたらした。」「世界の研究者によると、人類の歴史において、宗教、言語、文化の点で、モンゴルという安住の国に匹敵するような時代は今までになかった。」とモンゴル帝国によるユーラシア大陸の平和と発展が強調されており、政治・軍事的な観点だけでなく、13 世紀の世界地図、天文学、貨幣、紙幣、陶器などが展示されていた。近年の研究を反映されているといえるだろう。

しかし、やはり見落とせないのが、ナショナリズムの資源としてのチンギス・ハーンである。近年のグローバル・ヒストリーの歴史観に基づきチンギス・ハーンの評価がされていたが、やはり民族主義的な歴史観が近年の研究の受け皿になっているのではないだろうか。

グローバル・ヒストリーを特徴づける歴史学の手法に環境史（地球規模の温暖化や寒冷化などの環境の変化に着目し、歴史を把握しようとするもの）が挙げられるが、そうした観点からの展示や解説はなかった。モンゴルの主体性に重きを置く、展示の在り方が見て取れる

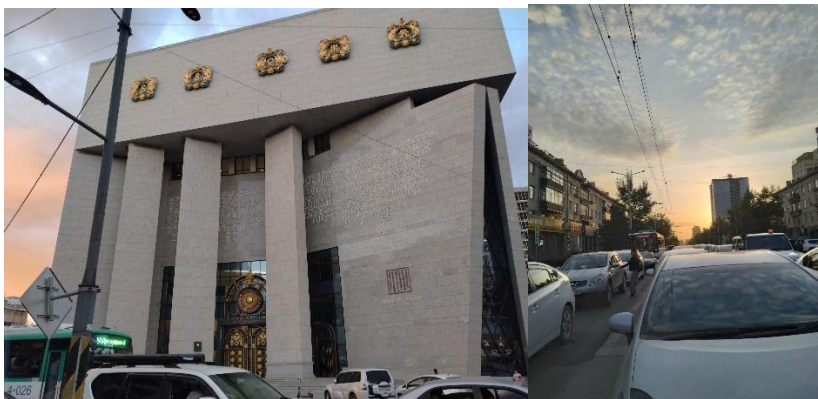
のではないだろうか。

◎仮説＜「平和の使者」としてのチンギス・ハーン＞

チンギス・ハーンはすでに「民族の英雄」として、不動の地位を築いているだろう。現在の平和を理想とする世界秩序のなかで、「世界の半分を馬に乗って遊んでいた」（バッチンギルさん）という表現は、侵略的な側面が否めない。現在の価値観の中で再評価するときに、13世紀の「モンゴルの平和」を強調したモンゴル帝国像や、紛争地域の平定者、世界の統合者などの「平和の使者」としてのチンギス・ハーン像が現れているのではないだろうか。13世紀当時、ヨーロッパにおいて「タタール人（モンゴル人）」と「タルタロス（地獄、冥界を意味する）」とが同一視されたり、モンゴル自身も各地の服属を促すため、自身の凶悪なイメージを利用したりしていた。その「モンゴル」の残虐、凶悪なイメージは外側からはともかく、内側からは180度反転しているのではないだろうか。のちに、教科書からも読み取ってみたい。

現代の展示はほとんどない清代末までの展示となっている。展示が終わると入口に戻るが、そこには現代モンゴルアートのブースが広がっていた。

現代画家たちのモンゴルを写した絵画などが展示されていた。現代の雰囲気とモンゴルの伝統や風景を織り交ぜたような作品や、社会主義時の工業化を風刺するような、作品も多かった。しかし、清代末から一気に現代に飛んだので、社会主義期の歴史がまるでなかったかのような気がしてしまった。意図的なのか、そうでないのかわからないが、次に見る国立歴史博物館と対比的で面白い。



・チンギスハーン博物館

・ウランバートルの風景

2. 国立歴史博物館

9/12にナンザイさんの息子エンヘオド君と訪れる。社会主義期に作られて革命博物館を民主化後に国立歴史博物館と改称しリニューアル。二階建ての博物館であった。展示は先史時代から始まる。チンギス・ハーン博物館とは違い、無機質、淡々と時代が流れていくような展示だった。チンギス・ハーン、モンゴル帝国に関しても、特大その存在を強調するような記述もなかった。しかし、社会主義期の展示に入ると、共産主義のイメージカラーである赤一色でブース内が彩られ、歴史がやっと始まったかのような印象を与えられた。社会主義期の

技術やソ連との宇宙開発などが展示されていた。そして、民主化後のブースに入ると今度は青一色で彩られていた。民主化の過程や民主化を指導したサンジャースレンギーン・ゾリク氏のことなどが説明されていた。社会主義時に作られ、それまでの歴史を無色なものとし、社会主義政権を正当化するような展示であり、民主化後の改修により、さらに現代を肯定するような展示だった。

匈奴から清末までの歴史を細かく展示しているチンギス・ハーン博物館と社会主義期、民主化後の現代に比重を置く国立歴史博物館。相反するような、補完しあうような2つの博物館であった。

◎中学の教科書

9/12 最終日市内観光と同時並行で教科書探しエンヘオド君が手伝ってくれた。普通科7年生つまり、中学1年生の2022年度版の歴史の教科書を参考にしたいと思う。チンギス・ハーンとモンゴル帝国を中心に見ていく。

<「平和の使者」としてのチンギス・ハーン>を検証してみる。

チンギス・ハーンについてだが、匈奴の再編者として登場する。匈奴は紀元前3世紀から1世紀ごろにモンゴル高原にあらわれた部族連合体である。モンゴル系の勢力がチンギス・ハーンからではなく古代モンゴルとしての匈奴があり、中世モンゴルとしてモンゴルを再統一したという歴史観になっている。日本の高校世界史の教科書では匈奴はモンゴル系、トルコ系など様々な説があり、民族系統不明とされている。チンギス・ハーンを古代モンゴルの再編者として登場させたのは国民国家としてのモンゴル国を成すうえで、古代からモンゴル人が連綿と続いてきた歴史観を待たせることになるだろう。

チンギス・ハーン博物館で感じた「平和の使者」としてのチンギス・ハーン像は教科書ではどうだろうか。結論から言うと、博物館で感じたほどのイメージは教科書から感じることはなかった。「モンゴルの平和」の創始者という表現はあったが、過度にイメージづける言葉は少なかった。出自からモンゴルの統一、対外征服がかかれていた。その際、侵攻先の国の歴史に触れる形で外国史を位置付けていた。(金、朝鮮、日本、キエフ公国など)さらに、中東地域に建てられたモンゴル政権イル・ハン朝や元朝、中央アジアに成立したチャガタイ・ハン国など、モンゴル帝国の拡大と関連させて他国史を記述している。自国史が世界史となる叙述のされかただった。しかし、そこには、戦争が起こる経緯から、侵略先の他国の歴史やモンゴルが与えた影響などが書き出され「モンゴルの平和」を強くイメージさせるほどの記述は少なかった。しかし、政治・軍事面だけでなく、経済、貨幣、文化交流、食文化、社会構造、法制度、などの観点からの記述も多く、支配・被支配だけの関係だけで終わらない歴史が書かれていた。環境史の観点からの記述は博物館同様に無かった。

ビジュアルで「モンゴルの平和」を前面に打ち出された印象の博物館とは、また違った印象を受けた。しかし、一定程度「平和の使者」としてのチンギス・ハーン像は記載されている。チンギス・ハーンの功績に「アジアとヨーロッパを越えた「モンゴルの平和」または「パックス・モンゴル」の創始者」「帝国全体が治安と平穏で支配されていた」などの記述はあっ

た。エンヘオド君が感じていた、「世界に平和をもたらした」チンギス・ハーン像はここに由来するだろう。

おわりに

都市化が急速に進むモンゴルで遊牧生活の体験は貴重なものとなった。モンゴル語もろくに話すことが出来ない自分を温かく迎えていただいて、ホームステイ先の方々に本当にありがたく思う。家畜の世話やゲルでの暮らし、乗馬や行事への参加、そして家族の輪に入れてくれたことなど多くのことが心に刻まれた。そして、ホームステイ先の方々だけでなく、ガイドのバーギさんとナンザイさんにも感謝したい。

遊牧民は放牧だけをしているのではなく、歴史的に定住民と交易などをして関わってきた。その現代版の暮らしをホームステイ先のゲルの方たちのなかに見たと思う。放牧という生活基盤と商業をうまく両立させている。都市化が進む中、都市化を活用し遊牧を続ける逞しさを見た。改めて、貴重な体験となった。

歴史学では、近年のグローバル・ヒストリーの潮流があるが、ナショナル・ヒストリーを乗り越えられるかという課題が簡単なものではないことが分かった。グローバル・ヒストリーの成果があっても、ナショナル・ヒストリー的な受け皿が用意されていると、グローバル・ヒストリーもナショナル・ヒストリーに転換することが起き得る。今回はモンゴルに行き、チンギス・ハーン博物館でそれを感じたが、このような事例はほかにもあるだろう。改めて、自国史を批判的に見ることと、評価することの難しさを感じた。そして、各時代の政治状況によって、内側からも外側からも評価が変わっていくチンギス・ハーンの巨大な影響力を感じる。凶悪な印象から、平和の創始者まで。その振れ幅が大きいというのはその巨大な影響力を示しているだろう。

パックス・モンゴリカにおいて、どのような人々がその支配を受け入れていたのか、または抵抗していたのか、など今後の関心が新たに開かれた。ナショナル・ヒストリーとグローバル・ヒストリーの関係なども理解を深めたいと思った。

最後になりますが、ご指導いただいた鈴木恵美先生、文学部事務室の方々に感謝申し上げます。



・エンヘオド君

・左 オーロボムさん

・左 トンボンさん 右 バッチン
ギルさん